

植 籬 院

書記官長

議長宛

大正七年十二月十三日

委員長 啓

委員

為 此 通 知

臺灣教育令審査報告

林 密 院

委員

小松原 西部 一木

久保 富井

前 綴

秘

臺灣教育令審査報告

今回御諮詢ノ臺灣教育令ニ付本官等審査委員
ヲ命セラレ数次ノ會同ヲ重ネテ當局者ノ説明
ヲ聽キ其ノ査覈ヲ遂ケタリ

抑臺灣教育令ハ臺灣ニ於ケル臺灣人ノ教育全
般ニ關スル根本規程ナリ臺灣島民ノ教育ハ從
前當局者ニ於テ各般ノ施設ヲ為シ來レリト雖
其ノ基ク所各別ノ成規ニ止マリ未タ之ヲ一括セ
ル基礎法制ヲ見ルニ至ラサルナリ然ルニ島民
教育ノ事タル臺灣統治ノ一大要義ニシテ將來

事宜ニ應シ其ノ施設ヲ改善増廣スヘキコト論
ヲ俟タス乃チ今ニ於テ島民教育ノ全般ニ通シ
根底タルヘキ準則ヲ確立シ其ノ範圍及程度ヲ
明定スルハ寔ニ妥當ノ處置ナリトス本令ハ此
ノ趣旨ニ因由シ内地教育諸規程及特ニ朝鮮教
育令ヲ參酌シ臺灣特殊ノ事情ヲ考量シテ立案
セラレタルモノニ係リ其ノ規定ノ梗概左ノ如
シ

(一) 劈頭ニ臺灣ニ於ケル臺灣人ノ教育ハ本令ニ
依ルヘキ旨ヲ定メテ島民教育カ本令所定ノ

限界ヲ出テサルノ義ヲ宣明ス(第一條)

(二) 教育ノ本義ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基
キ忠良ナル國民ヲ育成スルニ在リ其ノ施設
ハ時勢及民度ニ適合セシムルコトヲ期スヘ

キ旨ヲ定ム(第二條及第三條)

(三) 教育ヲ分テテ普通教育、實業教育、專門教育及
師範教育ノ四種ト為ス(第四條)

(四) 普通教育ハ國民教育ノ基礎ニシテ公學校ニ
於テ之ヲ授ク其ノ修業年限ヲ四年以内トシ
年齡八年以上ノ兒童ヲ入學セシム(第五條乃

至第八條

(五)實業教育ハ農業工業商業其ノ他ノ實業ニ關スル知識技能ヲ授クルコトヲ目的トシ其ノ學校ヲ實業學校及簡易實業學校トス實業學校ノ修業年限ヲ三年又ハ四年トシ年齡十二年以上ニシテ四年ノ公學校卒業ノ學力アル者ヲ入學セシム簡易實業學校ハ學科課程低キモノニシテ其ノ修業年限及入學資格ハ臺灣總督之ヲ定ム又女子ノ為ニ修業年限三年ノ實科學校ヲ置キ之ヲ實業學校ニ準ス(第九

條乃至第十四條)

(六)專門教育ハ高等ノ學術技藝ヲ授クルコトヲ目的トシ其ノ學校ヲ專門學校トス專門學校ニ豫科及本科ヲ置キ其ノ修業年限ヲ各三年又ハ四年トシ豫科ニハ年齡十二年以上ニシテ四年ノ公學校卒業ノ學力アル者ヲ入學セシム本科ニハ年齡十五年以上ニシテ豫科修了ノ學力アル者ヲ入學セシム(第十五條乃至第十八條)

(七)師範教育ハ公學校教員ヲ養成スルコトヲ目

的トシ其ノ學校ヲ師範學校トス師範學校ニ
豫科及本科ヲ置キ其ノ修業年限ヲ豫科一年
本科四年トシ豫科ニハ年齡十二年以上ニシ
テ四年ノ公學校卒業ノ學力アル者ヲ入學セ
シメ本科ニハ年齡十三年以上ニシテ豫科修
了ノ學力アル者ヲ入學セシム又師範學校ニ
ハ公學校教員講習科ヲ附置シ官立公立ノ實
業學校及實科學校ニハ師範科ヲ附置スルコ
トヲ得シメ何レモ其ノ修業年限ヲ一年トシ
簡易ニ公學校又ハ簡易實業學校ノ教員ヲ養

成セシム(第十九條乃至第二十三條)

四

(ハ)以上各種學校ノ教科編制設備授業料等ニ關
スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム(第二十四條)

(九)以上各種ノ學校中專門學校及師範學校ハ官
立ニ限り公學校ハ官立又ハ公立トシ其ノ餘
ノ實業學校簡易實業學校及實科學校ハ官立
公立又ハ私立トス公立ノ學校ノ設立廢止ハ
臺灣總督ノ認可ヲ受クヘキモノトス(第二十
五條第一項及第二項)

(十)本令ニ掲クル以外ノ特殊ノ教育ヲ為ス學校

其ノ他ノ教育施設ト私立ニ係ル學校其ノ他、
教育施設トニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所
ニ依ル(第二十五條第三項)

(土)本令施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム(附則第
一項)

本令ノ規定ヲ現行ノ成規ニ對比スルニ兩者差
異ノ顯著ナルモノ左ノ如シ

(一)現行規定ニ依レハ公學校ノ修業年限ハ六年
ヲ本則トシ土地ノ狀況ニ依リ四年ニ短縮ス
ルコトヲ得シメ其ノ入學年齡ヲ七年トシ蕃

五

人公學校ニ在リテハ其ノ修業年限ハ四年ヲ
本則トシ土地ノ狀況ニ依リ三年ニ短縮スル
コトヲ得シメ其ノ入學年齡ヲ八年トス本令
ニ於テハ通シテ公學校ノ修業年限ハ四年ヲ
本則トシ土地ノ狀況ニ依リ之ヲ短縮スルコ
トヲ得シメ其ノ入學年齡ヲ八年トス
(二)現行規定ニ依レハ男子ニ高等普通教育ヲ授
クヘキ公立中學校ノ制アルモ本令ニ於テハ
之ヲ認メス現ニ存スル公立中學校ハ現在ノ
生徒ノ在學スル間仍之ヲ存續スルコトヲ得

此シムルニ止マル(本令附則第三項)

(三) 現行規定ニ依レハ師範教育ノ本則タル國語
學校公學師範部乙科ハ六年ノ公學校卒業ノ
學力アル者ヲ入學セシメ其ノ修業年限ヲ四
年トス本令ニ於テハ師範學校ハ四年ノ公學
校卒業ノ學力アル者ヲ入學セシメ其ノ修業
年限ヲ豫科及本科ヲ通シ五年トス
(四) 實業教育及專門教育ニ關シテハ本令ニ依リ
始メテ一般的ニ其ノ系統ヲ明瞭ナラシム
以上新舊ノ差異ニ關シ當局ノ説明スル理由ノ

一ニ依レハ島民ニ對シ抽象的知識ヲ授クル高
等普通教育ハ或ハ高等遊民ヲ生シ且徒ラニ島
民ノ自覺心ヲ高ムルノ虞ナシトセサルカ故ニ
中學校ノ如キ種類ノ學校ヲ認メス公學校以上
ノ教育ヲ志望スル者ハ成ルヘク實業ノ學校ニ
入ラムコトヲ勸說シ當局ノ施設モ亦最モ實業
教育ニ重ヲ置クノ趣旨ナリト云フ
按スルニ今回本令ヲ制定セムトスル趣旨及其
ノ立案ノ骨子ハ概シテ允當ノ見解ナリト雖普
通教育ヲ僅ニ四年以内ノ公學校ニ止メムトス

ルカ如キハ明ニ抑制ニ失スルノ譏ヲ免レサル
所ナリトス蓋シ島民向學ノ欲求ハ必然ノ趨勢
ニシテ之ニ適度ノ満足ヲ與ヘ略其ノ好ム所ニ
就カシムルハ即チ施政ノ要諦ナリ而シテ教育
ノ程度稍高キニ上ルモ教科其ノ他ノ施設ニシ
テ事宜ニ適セハ弊害醸生スルコトナク却テ善
ク向學ノ趨勢ヲ利導スルコトヲ得ヘシ其ノ他
若干ノ條項ニ互リテ原案ニ修正ヲ加フルヲ妥
當ナリト認メタル所アリ其ノ條項及理由左ノ
如シ

(一) 全般ニ關スル修正

(甲) 教育ノ要義ハ德育ヲ含蓄スルコト本令第

二條ニ定マル所ノ如シ然レトモ尚關係各

條ニ掲ケテ特ニ德育ノ振興ニ留意スヘキ

コトヲ明ニスルヲ可トス是レ原案第九條

第十五條及第十九條ノ修正アル所以ナリ

(乙) 公學校ヨリ上級各種學校ニ進入スル連絡

ニ付原案ハ四年ノ公學校ヨリ接續セシム

ルモ次段ニ附陳スルカ如ク公學校ノ修業

年限ヲ改メテ本則六年ト為スニ於テハ六

年ノ公學校ヨリ接續セシムルコト當然ナ
リ之カ為惹テ上級學校ノ程度ヲ稍昂上セ
シムルニ至ルハ寧ロ妥當ノ處置ナリト謂
フヘク就中師範教育ニ於テ其ノ然ルヲ認
ムルナリ是レ原案第十二條第十八條第一
項及第二十二條第一項ノ修正アル所以ナ
リ

(丙)原案ハ上級各種學校ノ入學資格ヲ定ムル
ニ當リ概ネ其ノ年齡ノ最低限ヲ示スモ一
定ノ學歴ヲ要スル場合ニ在リテハ年齡ノ

限度自ラ明ナリ又相當ノ學力ヲ以テ是ル
場合ニ在リテハ必シモ年齡ノ限度ニ依ラ
サルコトヲ得シムルヲ可トス是レ原案第
十二條第十八條及第二十二條第一項及第
二項ニ於テ入學資格ノ年齡ニ關スル字句
ヲ削除スル所以ナリ

(二)普通教育ニ關スル修正

(甲)普通教育ヲ授クル學校トシテ公學校ノ外
高等普通教育ノ為高等普通學校及女子高
等普通學校ノ制ヲ設クルヲ可トス是レ原

案第五條及第六條ヲ修正シ修正案第七條ヲ追加スル所以ナリ

(乙) 公學校ノ修業年限ハ現制ノ通六年ヲ本則トスルヲ可トス其ノ入學年齡モ亦現制ノ通七年トスルコト初等普通教育ヲ一層有效ナラシムル所以ナリ仍テ原案第七條及第八條ヲ修正シ更ニ原案附則第二項但書ヲ削除ス

(丙) 高等普通學校及女子高等普通學校ノ目的、修業年限及入學資格ニ關スル規定ヲ追加

ス此ノ二校ハ大體ニ於テ内地ノ中學校及高等女學校ニ該當スルモノニシテ修業年限ヲ一ハ四年他ハ三年トシ何レモ六年ノ公學校卒業ノ學力アル者ヲ入學セシム修正案第十條乃至第十五條

女子高等普通學校ニ在リテハ特ニ修業年限三年以内ノ實科ノ制ヲ設クルヲ可トス(修正案第十六條)此ノ制ヲ立ツルニ於テハ原案ノ如ク女子ノ為別ニ實科學校ノ制ヲ設クルノ必要ナシ是レ原案第十四條其ノ

他實科學校ニ關スル條項ヲ削除スル所以
ナリ

高等普通學校及女子高等普通學校ハ普通
教育ノ學校ナルカ故ニ公學校ト同シク之
ヲ官立又ハ公立ニ限ルコト要當ナリ仍テ
原案第二十五條第一項ヲ修正ス
現ニ存スル公立中學校ハ之ヲ高等普通學
校トスヘシ國語學校附屬女學校ハ原案之
ヲ實科學校トスルヲ改メテ女子高等普通
學校ト為スヘシ是レ原案附則第二項及第

三項ノ修正アル所以ナリ
(三)專門教育ニ關スル修正

原案ハ專門學校ニ必ズ豫科及本科ヲ置キ豫
科ヲ四年ノ公學校ニ接續セシムルノ主義ヲ
採ル然レトモ既ニ高等普通學校ヲ認ムルニ
於テハ高等普通學校ヨリ直ニ專門學校本科
ニ進入スルヲ得シムルコト當然ニシテ又專
門學校ニ豫科ヲ必設スルコトヲ要セサルナ
リ即チ專門學校ニハ豫科ヲ附置スルコトヲ
得ルモノト為シ專門學校ノ入學資格ハ豫科

修了者又ハ高等普通學校卒業ノ學力アル者
ニ之ヲ認ムルヲ可トス是レ原案第十七條及
第十八條ノ修正アル所以ナリ

(四) 師範教育ニ關スル修正

原案ニ於テ官立公立ノ實業學校ニ短期ノ師
範科ヲ附置スルコトヲ許シ簡易實業學校ノ
教員ヲ養成セシムルノ例ニ倣ヒ高等普通學
校及女子高等普通學校ニモ亦修業年限一年
ノ師範科ヲ附置スルコトヲ許シ各其ノ學校
ノ卒業者ヲ入學セシメ公學校ノ教員ヲ簡易

ニ養成セシムルコト師範教育普及ノ見地ニ
照ラシ妥當ノ處置ナリト認ム仍テ原案第二
十三條ヲ修正ス

(五) 私立ノ學校ニ關スル修正

當局ノ説明ニ依レハ原案第二十五條第三項
ニ私立ノ學校ニ關スル事項ハ一ニ臺灣總督
ノ定ムル所ニ依ル旨ノ明文アルカ故ニ私立
ノ學校ニ對シテハ本令ノ規定ニ拘ラス當局
ニ於テ適宜ノ處置ヲ講スルノ趣旨ナリト云
フ然レトモ該條項ノ法意ハ本令各條ニ抵觸

セサル範圍内ニ於テ私立ノ學校ニ關スル規定ヲ臺灣總督ニ委任スルノ義ト解セサルヘカラス從テ現ニ存スル私立ノ學校ニシテ本令ノ規定ニ抵觸スルモノノ為ニハ別ニ條項ヲ設ケテ當分ノ内仍從前ノ例ニ依ラシムルコトヲ得ル旨ノ便法ヲ定メ以テ當局ヲシテ機ニ應ニ漸次整理スルノ方針ニ出テシムルノ趣意ヲ明ニスルヲ可トス是レ附則第四項ヲ追加スル所以ナリ

其ノ他間字句ヲ増減シ條項ヲ整理シタル所ア

ルモ同レモ規定ノ實質ニ關係スルコトナシ以上諸點ノ修正ニ付テハ當局ニ於テ別ニ異議ナキコトヲ確メタリ

本案 審査ニ方リ特ニ本官等ノ希望ニ堪ヘサル事項凡ソ二件アリ

(一) 初等普通教育ハ國民教育ノ基礎ニシテ國民タルノ性格ヲ涵養シ國語ヲ普及スルカ如キ主トシテ之ヲ其ノ功績ニ待タサルヘカラス從テ初等普通教育ノ興廢ハ直ニ島治ノ效果ニ影響スヘキコト極メテ明瞭ナルカ故ニ深

ク其ノ普通改善ニ留意セサルヘカラサルコ
ト論ヲ俟タス而シテ其ノ施設固ヨリ一二ニ
止マラスト雖就中公學校教員ニ其ノ人ヲ得
ルコト最モ重ヲ置クヘキ所ナリトス即チ
公學校教員ハ本島人ニシテ師範教育ヲ受ケ
タル者ヲ任用スルノ外内地人ニシテ相當ノ
教育ヲ受ケタル者ヲ以テ之ニ當ラシムルコ
ト緊要ニシテ當局亦年來此ノ方針ニ出ツト
云フモ今後益此ノ主義ニ則リ成ルヘク多數
ノ内地人適任者ヲ採用スルコト妥當ノ措置

ナリト認ム又島民ノ師範教育ニ在リテハ特
ニ力ヲ精神教育ニ盡シ他日兒童ニ師臨スヘ
キ者ノ徳性ヲ涵養スルコトノ肝要ナルハ言
ヲ煩ヒス是レ亦當局ニ於テ從前意ヲ用フル
所ナリト云フモ將來益茲ニ一層ノ努力ヲ致
サムコトヲ希望ス

(二) 今回本案ノ成立ニ依リ始メテ島民教育全般
ノ根本方針確定ス然ルニ島治ノ事タル最モ
其ノ地特殊ノ事情ヲ衡量スヘキモノアルカ
故ニ本令ニハ單ニ大綱ヲ掲ゲ其ノ餘ハ臺灣

當局ノ施設ニ委ネ以テ該當局ヲシテ直接其
ノ責ニ任セシムルコト策ノ得タルモノナリ
ト認ム依テ本令運用ノ任ニ膺ル者ハ深ク臺
灣ノ情況ヲ考ヘ時世ノ推移ヲ鑒ミ其ノ施設
能ク背廢ニ遠中スルヲ期セムコトヲ希望ス
審査委員會ニ於テハ上叙ノ修正ヲ加ヘテ本案
ヲ可決スヘキモノトシ右ノ希望事項ト共ニ全
會一致ヲ以テ之ヲ議決セリ
右審査ノ結果ヲ報告ス

大正七年十二月十三日

審査委員長

樞密顧問官子爵金子堅太郎

審査委員

樞密顧問官子爵曾我 祐準

樞密顧問官 小松原英太郎

樞密顧問官子爵岡部長職

樞密顧問官 一本喜徳郎

樞密顧問官男爵久保田 讓

樞密顧問官 富井 政章

樞密院議長公爵山縣有用殿

大正七年十二月十八日

委員長

返

委員

五五五
五五五
五五五

中興学校令改正件外三件審査報告